『淮南萬畢術』拾遺（二）

有馬　卓也

6　『如意方』

本書は『南史』梁本紀下において梁簡文帝撰とされるもので、『隋書』経籍志・子部・医方には十巻として記載されている。その後、中国では滅んでしまったのだが、平安時代には日本に伝わっており、『日本国見在書目録』医方家にその名が見えるほか、丹波康頼の『醫心方』に多数収められることによって、その命脈を保っている。

さて、葉徳輝は集本『淮南萬畢術（以下『萬畢』と略記）』の中で『醫心方』に収められた『萬畢』と同質の文にも目配せし、そのことを注記している。葉徳輝本に収められた『萬畢』で『醫心方』所収の『如意方』と関連するとされているのは以下の五条である。いずれも『醫心方』巻二六に見えるものである。まずそれを提示しておこう（各条の冒頭にゴチックで示した数字は葉徳輝本『萬畢』の通し番号であり。以下の文は『萬畢』の文章である。また『醫心方』の文章はひとまず葉徳輝の注の文章をそのまま示しておいた）。

（六） 竈之土不思故郷。〔注〕取竈前三寸方半寸、取中土持之、遠出令人不思故郷。（竈の土は故郷を思はず。〔注〕竈の前の三寸方半寸を取りて、中の土を取りて之を持てば、遠くに出づるも、人をして故郷を思はざらしむ。）

→『医心方』巻二六相愛方第五「又云令人不思術。遠行、懐竈土、不思故郷。」

（九） 鵲腦令人相思。〔注〕取雌雄鵲各一、燔之四道通。丙寅日與人共飲酒、置腦酒中、則相思也。（鵲の脳は人をして相思はしむ。〔注〕雌雄の鵲各一を取り、之を四道通に燔く。丙寅の日に人と共に飲酒するに、脳を酒中に置けば、則ち相思はしむ。）

→『医心方』巻二六相愛方第五「又方。戊子日、取鵲巣屋下土焼作屑、以酒共服、使夫婦相愛。」

（一八） 蜘蛛塗布、而雨自晞。〔注〕取蜘蛛置甕中、食以膏百日。煞以塗布、而雨不能濡也。（蜘蛛は布に塗れば、而ち雨自ずから晞（かわ）く。〔注〕蜘蛛を取りて甕中に置き、食はすに膏を以てすること

百日。殺して以て布に塗れば、而ち雨ふるも濡らすあたはざるなり。）

↓『医心方』巻二六避雨湿方第一〇「如意方云雨不湿衣術。取蜘蛛、置瓦甕中、食以豕脂百日、煞蜘蛛以塗手巾、大雨不能濡。」

（二一）守宮飾女臂有文章。〔注〕取守宮新合陰陽者牝牡各一、藏之瓮中、陰乾百日。以飾女臂、則生文章。與男子合陰陽輒滅去。（守宮もて女の臂に飾れば文章あり。〔注〕守宮の新たに陰陽を合せし者牝牡各一を取りて、之を甕中に蔵し、陰乾すること百日。以て女の臂に飾れば、則ち文章を生ず。男子と陰陽を合せば輒ち滅去す。）

↓『医心方』巻二六相愛方第五「又云験淫術。五月五日若七月七日、取守宮、張其口、食以丹、視腹下赤止、瓮中陰干、百日出、少々治之、付女身、拭、終不去、若有陰陽事、便脱。曰、守宮蝘蜒也、牝牡新交三枚、良之。」

（三九）馬毛犬尾、親友自絶。〔注〕取馬毛犬尾、置朋友衣中、若夫婦衣中。自相憎矣。（馬毛・犬尾は、親友をして自ずから絶たしむ。〔注〕馬毛・犬尾を取りて、朋友の衣の中、若しくは夫婦の衣の中に置く。自ずから相憎む。）

↓『医心方』二十六『如意方』「如意方云令人相憎術。取馬髪、犬毛、置夫婦床中、即相憎。」

ただし『醫心方』巻二六には葉徳輝が示した右以外にも『萬畢』と同質の方術が『如意方』を出典として多数見られる。『如意方』がこれらも『萬畢』から採録した可能性は少なくないと考える。また『醫心方』全体を見渡せば、全八一条に及ぶ『如意方』からの引用がある。以下、全八一条を本号と次号に分けて提示する。

本号では第一条から第四一条を提示するが、そのうち三三条（二条～三四条）が『醫心方』巻四の鬢髪部に見えるものである。巻四は特に毛髪と肌荒れに関する記述を集めたものであるが、『萬畢』においても、毛髪に関する類似の記述が七〇・七三・七五条に、肌荒れに関する類似の記述が一六・一一〇条に見られる。ここでこれらも簡単に示しておこう。

（七〇）欲髪不脱、梳頭灑千遍。〔注〕用麻子中人・桐葉・乳汁煮之。沐二十日髪長。（髪の脱けざるを欲せば、頭を梳ずりて灑すこと千遍せよ。〔注〕麻子中人・桐葉・乳汁を用いて之を煮る。沐すること二十日にして髪長ず。）

（七三）伏苓散。令人身輕益氣力。髪白更黒、齒落更生、目冥復明、延年益壽、老而更少方。〔注〕伏苓四兩・朮四兩・稲米八斤。凡三物擣末下篩。服方寸上、廿日日四復。廿日知。卅日身輕。六十日百病愈。八十日髪落更生。百日夜見明。長服延年矣。（伏苓散は、人身をして軽くして気力を益す。髪の白きは更に黒く、歯の落つるは更に生え、目の冥きは復明るく、年を延べ寿を益し、老いて更に少くせしむるの方。〔注〕伏苓四両・朮四両・稲米八斤。凡そ三物もて擣きて末とし下し篩ふ。方寸匕を服すること廿日、

日に四復。廿日にして知るあり。卅日にして身軽し。六十日にして百病愈ゆ。八十日にして髪の落つるは更に生ゆ。百日にして夜見ること明。長く服せば延年す。）

※本条は葉徳輝は『医心方』巻二六所引の『淮南子』と関連付けている。ただし現行本『淮南子』には本文と関連するものは見られない。

（七五）還精丸。〔注〕焼已髪、合頭垢等分合、服如大豆許三丸。名曰還精。令頭不白。（還精丸。〔注〕已髪を焼きて、頭垢等分を合し、大豆許（ばか）りの如きもの三丸を服す。名づけて還精と曰ふ。頭をして白くならざらしむ。）

（一一六）蘖令面悦。〔注〕取蘖葉・三寸土・瓜三枚・大棗七枚、膏和塗面、不得四五日、立悦矣。先以湯洗面、乃傅蘖。（蘖（ひこばえ）は面をして悦せしむ。〔注〕蘖（ひこばえ）の葉三寸・土瓜三枚・大棗七枚を取りて、膏もて和して面に塗れば、四五日を得ずして立ちどころに悦ぶ。先づ湯を以て面を洗ひ、乃ち薬を傅く。）

※本条を葉徳輝は『医心方』巻二六所引の『葛氏方』と関連付けている。

（一一〇）〔注〕七月七日、午時、取生瓜葉七枚、直入北堂中、向南立、以拭面鬯、卽當滅矣。（〔注〕七月七日、午の時、生瓜の葉七枚を取りて、直ちに北堂中に入り、南に向ひて立ち、以て面の鬯（えくぼ）を拭へば、即ち当に滅すべし。）

以下八一条を列挙する。経験に基づく医学系治療が多いが、中に特異な条件を伴う呪術系治療も含む。『醫心方』はテキストとして『国宝半井家本醫心方』（オリエント出版、一九九一）所収のものを使用した。また今宏美氏の「中世中国文人の願望―『如意方』の輯佚からみた世界―」（http://mayanagi.hum.ibaraki.ac.jp/students/01/01kon.htm）も参照した。

［1］

【原文】

『如意方』。治隠軫術。漏蘆作湯、以洗浴。（『醫心方』巻三・治中風隠疹方第十八）

【書き下し】

如意方。隠軫（①）を治す術。漏蘆（②）もて湯を作り、以て洗浴す。

【注】

① 蕁麻疹のこと。「軫」は「疹」に同じ。

② クロクサ、アリクサのこと。

【現代語訳】

『如意方』。蕁麻疹を治す術。クロクサで煮汁を作り、それで入浴する。

【補】

○ 医学系治療である。

［2］

【原文】

『如意方』云。長髪術。東行棗根、直者長三尺、以中央當甑飯蒸之、承兩頭汁。以塗頭、髪長七尺。（『醫心方』巻四・治髪令生長方第一）

【書き下し】

『如意方』に云ふ。髪を長くする術。東行せし棗の根の、直き者長さ三尺、中央を以て甑の飯するに当てて之を蒸し、両頭の汁を承く。以て頭に塗れば、髪長ずること七尺。

【現代語訳】

『如意方』に言う。髪を長くする術。東に向かって伸びている棗の根で、真っ直ぐなもの長さ三尺を準備し、（根の）中央を甑で飯を炊いているものに当てて蒸し、両端から出てくる汁を受ける。それを頭に塗れば髪は七尺伸びる。

【補】

○ 医学系治療である。ただし桑の根が「東行（東に向かっている）」するものに限定されていることに、医学的根拠がどれほどあるかは不明。

［3］

【原文】

又方。白芷四兩、煮沐頭、長髪。（『醫心方』巻四・治髪令生長方第一）

【書き下し】

又方。白芷〔①〕四両もて、煮て沐頭す。髪を長ぜしむ。

【注】

① ハナウド、ヤブウドのこと。

【現代語訳】

又方。ハナウド四両を準備し、それを煮て（その煮汁で）髪を洗う。髪を長くする。

【補】

○ 医学系治療である。

［4］

【原文】

又方。麻子人三升・白桐葉一把、米汁煮、去滓、適寒温、以沐廿日髪長。（『醫心方』巻四・治髪令生長方第一）

【書き下し】

又方。麻子仁〔①〕三升・白桐葉一把、米汁もて煮、滓（かす）を去りて、寒温を適（ととの）へ、以て沐すること廿日にして髪長ず。

【注】

① 文意により「人」を「仁」に改めた。仁は果実の核の部分（さね）。

【現代語訳】

又方。麻の実の仁三升と白桐の葉一把を米の研ぎ汁で煮て、滓を取り、適温に冷ます。それで二十日間洗髪すると髪が長くなる。

【補】

○ 医学系治療である。

［5］

【原文】

又方。麻子人三升・秦桝二升、合研、漬之一宿。以沐頭日一、長髪二尺。（『醫心方』巻四・治髪令生長方第一）

【書き下し】

又方。麻子人三升・秦椒（①）二升もて、合はせ研ぎ、之を漬くること一宿。以て沐頭すること日に一たびせば、髪を長ずること二尺。

【注】

① 文意により「桝」を「椒」に改めた。秦椒はサンショウ、ハジカミのこと。

【現代語訳】

又方。麻の実の仁三升とサンショウ二升を合わせて研ぎ、一晩（水に）漬けておく。この汁で毎日一回洗髪すると髪が二尺伸びる。

【補】

○ 医学系治療である。ただし伸びる髪の長さの二尺という数字にどれほどの根拠があるのかは不明。

［6］

【原文】

又方。乙卯・丙辰日沐浴、令人髪長。（『醫心方』巻四・治髪令生長方第一）

【書き下し】

又方。乙卯・丙辰の日に沐浴せば、人をして髪長ぜしむ。

【現代語訳】

又方。乙卯の日と丙辰の日に沐浴をすれば、髪が長くなる。

【補】

○ 期日指定の呪術系医療である。

［7］

【原文】

『如意方』。軟髪術。沐頭竟、以酒更濯亦髪即軟。（『醫心方』巻四・治髪令光軟方第二）

【書き下し】

『如意方』。髪を軟かくする術。沐頭し竟（おは）れば、酒を以て更に濯（すす）げば亦髪即ち軟かし。

【現代語訳】

『如意方』。髪を柔らかくする術。洗髪の後、更に酒ですすぐと、これも髪はすぐに柔らかくなる。

【補】

○ 医学系治療である。

［8］

【原文】

又方。新生烏鷄子三枚。先作五升麻沸湯、出、楊之令温。破鷄子悉内湯中、攪令和、復煮令熱。方爲三沐三濯之。三日一沐、令髪軟。（『醫心方』巻四・治髪令光軟方第二）

【書き下し】

又方。新生の烏鷄子三枚。先に五升の麻沸湯を作り、出して、之

を揚げて〔①〕温かくせしむ。鶏子を破りて悉く湯の中に内れ、攪ぜて和せしめ、復煮て熱くせしむ。方に三たび沐して三たび之を濯ぐを為す。三日に一たび沐せば、髪をして軟かくせしむ。

【注】

① 文意により「楊」を「揚」に改めた。

【現代語訳】

又方。生まれたばかりの黒い鶏の卵を三個準備する。先に五升の麻を入れて湯を沸かし、麻を取り出して（冷まして）温かくしておく。そこに卵を割ってお湯に入れてよくかき混ぜ、再び煮て熱くする。このお湯で（髪を）三回洗い、三回すすぐ。これを三日に一回行うと、髪を柔らかくする。

【補】

○ 医学系治療と考えてよかろうが、鶏が黒色指定である根拠は不明。

[9]

【原文】

又云。光髪術。搗大麻子、蒸令熟。以汁潤髪、令髪不断、生光澤。大良。（『醫心方』巻四・治髪令光軟方第二）

【書き下し】

又云ふ。髪を光らしむる術。大麻子を搗き、蒸して熟〔①〕さしむ。汁を以て髪を潤せば、髪をして断たず光沢を生ぜしむ。大いに良し。

【注】

① 文意により「熟」を「熱」に改めた。

【現代語訳】

又言う。髪に光沢をもたせる術。大麻の実を搗き、それを蒸して熱しておく。その汁で髪を潤せば、髪が切れなくなり、光沢を出すことができる。とてもよい。

【補】

○ 医学系治療である。

[10]

【原文】

『如意方』云。堅髪術。馬藺灰一升・紫寧灰五升・胡麻灰七升。凡三灰各各淋之。先用馬藺灰汁、次用柴寧灰汁、後用胡麻灰汁。（『醫心方』巻四・治髪令堅方第三）

【書き下し】

『如意方』に云ふ。髪を堅くする術。馬藺〔①〕灰一升・紫寧〔②〕灰五升・胡麻灰七升。凡て三つの灰に各各之を淋ぐ。先づ馬藺灰の汁を用い、次に柴寧灰の汁を用い、後に胡麻灰の汁を用う。

【注】

① ネジアヤメのこと。

② 不明。

【現代語訳】

『如意方』に言う。髪を堅くする術。ネジアヤメの灰一升・紫寧の灰五升・胡麻の灰七升、全三種類の灰にそれぞれ水を注ぐ。まず馬藺の灰の汁を用い、次に紫寧の灰の汁を用い、最後に胡麻の灰の汁を用いる。

【補】

○ 医学系治療である。

［11］

【原文】

『如意方』。染髪白術。取穀實、搗取汁。和水銀以拭髪、皆黑。（『醫心方』巻四・治白髪令黑方第四）

【書き下し】

『如意方』。髪の白きを染むる術。穀実〔①〕を取り、搗きて汁を取る。水銀と和して以て髪を拭へば、皆黒し。

【注】

① 穀物の実のこと。

【現代語訳】

『如意方』。白髪を染める術。穀物の実を準備して、搗いて汁を取る。その汁と水銀を混ぜ合わせて髪を拭えば、（髪は）全て黒くなる。

【補】

○ 医学系治療である。

［12］

【原文】

又方。熟桑椹以水漬、服之。令髪黑。（『醫心方』巻四・治白髪令黑方第四）

【書き下し】

又方。熟せし桑椹〔①〕を水を以て漬け、之を服す。髪をして黒くせしむ。

【注】

① 桑の実。

【現代語訳】

又方。熟した桑の実を水に漬けておき、それを服用すれば髪を黒くする。

【補】

○ 医学系治療である。

［13］

【原文】

又云。反白髪術。以五・八千日、燒白髪。（『醫心方』巻四・治白髪令黑方第四）

【書き下し】

又云ふ。白髪を反する術。五・八の午〔①〕の日を以て、白髪を燒く。

【注】

① 文意により「千」を「午」に改めた。

【現代語訳】

又云う。白髪を（黒髪に）もどす術。五と八の午の日に白髪を燒く。

【補】

○ 期日指定の呪術系療法である。

［14］

【原文】

又方。癸亥日除白髪、甲子日燒之、自斷。(『醫心方』巻四・治白髪令黒方第四)

【書き下し】

又方。癸亥の日に白髪を除き、甲子の日に之を燒けば、自ずから断つ。

【現代語訳】

又方。癸亥の日に白髪を抜き、甲子の日にこれを燒けば、白髪は自然となくなる。

【補】

○ 期日指定の呪術系療法である。

[15]

【原文】

『如意方』。治鬢黄術。胡麻・白灰分等、以水和塗鬢。一方。漿和、夕塗、明日洗去。便黒。(『醫心方』巻四・治鬢髪黄方第五)

【書き下し】

『如意方』。鬢の黄なるを治す術。胡麻・白灰もて分等し、水を以て和して鬢に塗る。一方。漿(①)もて和し、夕に塗り、明日に洗ひ去る。便ち黒し。

【注】

① 「漿」のみの場合、酒(こんず)・おもゆ・湯冷まし等の意味があり、ここでどれを示すかは判然としない。

【現代語訳】

『如意方』。鬢の黄ばみを治す術。胡麻と白灰を等分し、水と混ぜ合わせて鬢に塗る。一方。(胡麻と白灰を等分したものを)漿水と混ぜ合わせ、夕方に(髪に)塗って、翌日に洗い流す。黒くなる。

【補】

○ 医学系治療である。

[16]

【原文】

『如意方』。治鬢髪禿落術。桑樹皮、削去黄黒取白、剉二三升。以水淹、煮五沸。去滓、以洗沐鬢髪數、爲不落。(『醫心方』巻四・治鬢髪黄方第五)

【書き下し】

『如意方』。鬢髪の禿げ落つるを治す術。桑の樹皮もて、黄黒を削り去り白を取り、剉(きざ)むこと二三升。水を以て淹(ひた)し、煮て五たび沸す。滓(かす)を去りて、以て鬢髪を洗ひ沐すること数しばなれば、為に落ちず。

【現代語訳】

『如意方』。鬢髪が禿げ落ちるのを治す術。桑の木の皮を準備して、黄黒の部分を削り取って、白い部分を取る。二三升分を刻む。これを水に浸して五回沸騰させる。滓を取り、それで鬢髪を数回洗えば、その効果として(鬢髪が)抜け落ちなくなる。

【補】

○ 医学系治療である。

[17]

【原文】

又方。甘草二兩、㕮咀、漬一升湯中、沐頭。不過再三、則不落。（『醫心方』巻四・治鬢髮黄方第五）

【書き下し】

又方。甘草二両もて、㕮咀①し、一升の湯の中に漬けて、沐頭す。再三を過ぎずして、則ち落ちず。

【注】

① 文意により「㕮」を「㕮」に改めた。㕮咀は薬を口歯で噛みこなすこと。

【現代語訳】

又方。甘草二両を準備して、噛み砕き、一升のお湯の中に漬けたもので洗髪する。二三回も洗わないうちに（髪が）抜けなくなる。

【補】

○ 医学系治療である。

[18]

【原文】

『如意方』。生毛髮術云。取烏内器中埋於丙丁上入三尺。百日以塗人宍、卽生毛。（『醫心方』巻四・治頭燒鬢髮不生方第十）

【書き下し】

『如意方』。毛髮を生ぜしむる術に云ふ。烏を取りて器の中に内れ、丙丁に土①に埋め入るること三尺。百日して以て人の宍に塗れば、即ち毛を生ず。

【注】

① 文意により「上」を「土」に改めた。

【現代語訳】

『如意方』。毛髮を生やす術に言う。カラスを取って器の中に入れ、丙丁の日に土の深さ三尺に埋める。百日たったものを肌に塗れば、すぐに毛が生える。

【補】

○ 期日指定を含む呪術系医療である。文字通り「烏」をカラスで解釈しておいたが、黒い何か（毛髮など）の可能性もある。

[19]

【原文】

又方。塗好蜜。（『醫心方』巻四・治頭燒鬢髮不生方第十）

【書き下し】

又方。好蜜を塗る。

【現代語訳】

又方。上質の蜜を塗る。

【補】

○ 医学系治療である。

[20]

【原文】

『如意方』。眉中無毛方。以針桃傷、付蜜、生毛。（『醫心方』巻四・治眉脫令生方第十一）

【書き下し】

『如意方』。眉中に毛なきを治す①方。針を以て傷を挑②し、

蜜を付くれば、毛を生ず。

【注】

① 表題と文意より「治」字を補った。

② 文意により「桃」を「挑」に改めた。

【現代語訳】

『如意方』。毛のない眉を治す方法。針で（眉の部分に）傷をつけ、蜜を付けると毛が生えてくる。

【補】

○ 医学系治療である。

［21］

【原文】

『如意方』。治面上悪瘡術。胡粉五兩熬。黄蘗・黄連五兩、三物、治下篩、粉面瘡上日三。（『醫心方』巻四・治頭面瘡方第十三）

【書き下し】

『如意方』。面上の悪瘡を治す術。胡粉〔①〕五両もて熬す。黄蘗〔②〕・黄連〔③〕五両の三物もて、治〔④〕して篩に下し、面の瘡の上に粉すること日に三たびす。

【注】

① おしろい（鉛粉に脂を和したもの）。

② 黄蘗に同じ。キハダのこと。

③ オウレンのこと。

④ ここの「治」がどういう所作を示すのかは不明。「治」の可能性もあるが、それでも意味は通じない。

【現代語訳】

『如意方』。顔面の悪性のできものを治す術。おしろい五両を準備して煎る。キハダとオウレン五両の計三種を搗いてから篩にかけ、それを一日三回、顔のできものにつける。

【補】

○ 医学系治療である。

［22］

【原文】

『如意方』。治皰術。薺苨二分・桂宍一分、下篩、以酢漿服方寸匕日一止。晩即服支子散。相參也。（『醫心方』巻四・治面皰瘡方第十四）

【書き下し】

『如意方』。皰〔①〕を治す術。薺苨〔②〕二分・桂宍〔③〕一分もて、篩に下し、酢漿〔④〕を以て方寸匕を服すること日に一たびにして止む。晩には即ち支子〔⑤〕散を服す。相参する〔⑥〕なり。

【注】

① ニキビのこと。

② ソバナのこと。

③ 肉桂に同じか。

④ ここでは酸味の出た酒をさすか。

⑤ 梔子に同じ。クチナシの実のこと。

⑥ ここでは互いに作用し合うの意か。

【現代語訳】

『如意方』。ニキビを治す術。ソバナ二分・肉桂一分を準備して、それを篩にかけ、方寸匕の分量を一日一回だけ酢漿で服用する。晩にはクチナシの実の粉末を服用する。これらが互いに作用し合う。

【補】

○ 医学系治療である。

[23]

【原文】

支子散方。支子人一斤、搗下篩。先食、以酢漿服方寸匕日三。先服薺苨桂散、次後服支子散。卽以同日服之。（『醫心方』巻四・治面皰瘡方第十四）

【書き下し】

支子散の方。支子〔①〕仁一斤もて、搗きて篩（ふるい）に下す。食に先んじて、酢漿を以て方寸匕を服すこと日に三たび。先に薺苨桂散〔②〕を服し、次に後に支子散を服す。即ち同日を以て之を服す。

【注】

① 文意により「支」を「支」に改めた。

② [22]のものをさす。

【現代語訳】

梔子散の処方。梔子仁一斤を準備して、搗いて篩にかける。食前に方寸匕の分量を一日三回、酢漿で服用する。先にソバナと肉桂の粉末を服用し、その後で梔子散を服用する。つまり同日に二種類を服用する。

【補】

○ 医学系治療である。

[24]

【原文】

『如意方』。治黥䵸術。以鸕鷀白矢傅之。（『醫心方』巻四・治面皯䵸方第十五）

【書き下し】

『如意方』。黥䵸〔①〕を治す術。鸕鷀〔②〕の白矢〔③〕を以て之に傅（つ）く。

【注】

① シミ・ソバカスのこと。

② ウノトリのこと。

③ 白い糞のこと。

【現代語訳】

『如意方』。シミ・ソバカスを治す術。ウノトリの白い糞をつける。

【補】

○ 医学系治療である。

[25]

【原文】

又方。以樹穴中水、洗之。（『醫心方』巻四・治面皯䵸方第十五）

【書き下し】

又方。樹穴中の水〔①〕を以て、之を洗ふ。

【注】

① 樹木のウロにたまった水のこと。

【現代語訳】

又方。木の穴にたまった水で洗う。

【補】

○ 医学系治療である。

[26]

【原文】

又方。伏苓・白石脂、分等末。蜜和塗之日三。(『醫心方』巻四・治面皯䵟方第十五)

【書き下し】

又方。伏苓・白石脂〔①〕もて、分等し末にす。蜜もて和して之に塗ること日に三たびす。

【注】

① 石脂の白いもの(青黄黒白赤の五種がある)。

【現代語訳】

又方。茯苓と白石脂を準備して、等分して粉末にする。蜜と混ぜ合わせて一日三回塗る。

【補】

○ 医学系治療である。

[27]

【原文】

『如意方』。治面瘡術云。前治皰薺苨桂宍方、亦治之。在面皰方。(『醫心方』巻四・治鼻皰方第十六)

【書き下し】

『如意方』。面瘡〔①〕を治すの術に云ふ。前の皰を治すに薺苨桂宍もてするの方〔②〕も、亦之を治す。面皰の方に在り。

【注】

① 顔や鼻にあらわれた飲酒による皰(ザクロ鼻)こと。

② [22]をさす。

【現代語訳】

『如意方』。赤鼻を治す術に言う。前述のニキビを治す薺苨と桂散の処方がザクロ鼻にも効く。ニキビの処方にある。

【補】

○ 医学系治療である。

[28]

【原文】

『如意方』。治癧瘍術。半天河水、洗之。(『醫心方』巻四・治癧瘍方第十八)

【書き下し】

『如意方』。癧瘍〔①〕を治す術。半天河水〔②〕もて、之を洗ふ。

【注】

① ナマズ肌。癜風(黒色のものと白色のものがある)。

② 樹木のウロにたまった水のこと。

【現代語訳】

『如意方』。ナマズ肌を治す術。樹木のウロにたまった水で洗う。

【補】

○ 医学系治療である。

[29]

【原文】

又方。荷葉上水、洗之。（『醫心方』巻四・治瘡瘍方第十八）

【書き下し】

又方。荷葉〔①〕上の水もて、之を洗ふ。

【注】

① ハスのこと。

【現代語訳】

又方。ハスの葉の上にたまった水で洗う。

【補】

○ 医学系治療である。

[30]

【原文】

『如意方』。治白癜・赤疵術。用竹中水如馬尿者、洗之。（『醫心方』巻四・治赤疵方第廿）

【書き下し】

『如意方』。白癜〔①〕・赤疵〔②〕を治す術。竹中の水の馬尿の如き者を用いて、之を洗ふ。

【注】

① 白ナマズ（白色癜風）のこと。

② 黒ナマズ（黒色癜風）のこと。

【現代語訳】

『如意方』。白ナマズと黒ナマズを治す術。竹の中に溜まった馬の尿のような水で洗う。

【補】

○ 医学系治療である。

[31]

【原文】

『如意方』。治黯黜術。鸕鷀白尿、傅之。（『醫心方』巻四・治黒子方第廿一）

【書き下し】

『如意方』。黯黜〔①〕を治す術。鸕鷀〔②〕の白尿もて、之を傅く。

【注】

① 文意より「黯黜」を「黯黑」に改めた。黯黑はホクロ（黒子）のことであろう。

② ウノトリのこと。

【現代語訳】

『如意方』。ホクロを治す術。ウノトリの白い糞を付ける。

【補】

○ ひとまず医学系治療としておく。

[32]

【原文】

又方。藿灰・石灰、醇苦酒煎、以簪塗黑、須臾滅去。（『醫心方』巻四・治黑子方第廿一）

【書き下し】

又方。藿〔①〕灰・石灰を、醇苦酒〔②〕もて煎じ、簪（かんざし）を以て黒に塗れば、須臾にして滅去す。

【注】

① ナデシコのこと。

② 酢のこと。

【現代語訳】

又方。ナデシコの灰と石灰を濃い苦酒で煎り、簪で塗るとすぐに消える。

【補】

○ 医学系治療である。

〔33〕

【原文】

『如意方』。取故掃床蒂、嚮青虹咒曰「厶甲患眈子。就青虹乞差。青虹没、眈子脱。」意仍送蒂置都路口而還。勿反顧。如此眈目漸々消滅。（『醫心方』巻四・治疣目方第廿二）

【書き下し】

『如意方』。故き床を掃ふ蒂を取りて、青虹に向ひて呪して曰く「厶甲（それがし）〔①〕眈〔②〕子を患ふ。青虹に就きて差（いや）さんことを乞ふ。青虹没して、眈子脱す」と。竟（おは）れば〔③〕仍ち箒を送りて都路口〔④〕に置きて還る。反顧することなかれ。此の如くんば眈目漸々として消滅す。

【注】

① 「厶」は「某」に同じ。

② 文意により「眈」を「肬」に改めた。「肬」はイボのこと。標題の「疣目」からウオノメをさすものとしておく。

③ 文意により「意」を「竟」に改めた。

④ 都へと通じる道の入り口。

【現代語訳】

『如意方』。古い床をはくための箒を持ち、青い虹に向かって呪文を唱える。「私□□はウオノメを患っています。青い虹に治療をお願いします。青い虹が消えれば、ウオノメもとれますように」と。呪文が終ったら、箒を都へと通じる道路に置いて帰る。振り返ってはならない。ウオノメはしだいに消えてなくなる。

【補】

○ 呪術系医療である。

〔34〕

【原文】

又方。雷時以手檛眈、擲與雷二七過、卽脱。（『醫心方』巻四・治疣目方第廿二）

【書き下し】

又方。雷の時 手を以て肬〔①〕を摘（つま）〔②〕み、擲（なげ）〔③〕うちて雷に与ふること二七過すれば、即ち脱す。

【注】

① 文意により「眈」を「肬」に改めた。
② 文意により「檛」を「摘」に改めた。
③ 文意により「穲」を「擲」に改めた。

【現代語訳】

又方。雷が鳴った時、手でウオノメを摘まみ、雷に向かって十四回以上投げつければ、すぐに取れる。

【補】

○ 呪術系医療である。

[35]

【原文】

『如意方』。治鼻衄術。取衄血、以書其人額、云「今ム日、血忌字。」即止。當随今日甲乙也。（『醫心方』巻五・治鼻衄方第三十六）

【書き下し】

『如意方』。鼻衄〔①〕を治す術。衄血を取りて、以て其の人の額に書して、云ふ「今ム日〔②〕、血忌字」と。即ち止む。当に今日の甲乙〔③〕に随ふなり。

【注】

① 「衄」は鼻血のこと。
② 「ム」は「某」に同じ。
③ ここでは日付のこと。

【現代語訳】

『如意方』。鼻血を治す術。鼻血をとって、その人の額に「今□□の日、血忌字」と書く。すぐに止まる。某日は（その日の）日付に従うこと。

【補】

○ 呪術系医療である。

[36]

【原文】

『如意方』。治卒心痛術。畫地作五字、撮中央、以水一升攪、飲之。（『醫心方』巻六・治心痛方第三）

【書き下し】

『如意方』。卒〔①〕心痛を治す術。地に画して五字〔②〕を作り、中央を撮りて、水一升を以て攪し、之を飲む。

【注】

① 急な、突然の、の意。
② 五文字からなるなんらかの呪文であると思われるが、詳細は不明。

【現代語訳】

『如意方』。急な心臓の痛み治す術。地面に五字を書き、中央（の土）をとって、一升の水でまぜて飲む。

【補】

○ 呪術系医療である。

[37]

【原文】

『如意方』。治卒腹痛術。書帋作兩蜈蚣相交、呑之。（『醫心方』

巻六・治腹痛方第四)

【書き下し】

『如意方』。卒腹痛を治す術。帋〔①〕に書して両蜈蚣の相ひ交はるを作り、之を呑む。

【注】

① 「紙」に同じ。

【現代語訳】

『如意方』。急な胸の痛みを治す術。二匹のムカデが交わっている図を紙に描き、飲み込む。

【補】

○ 呪術系医療である。

[38]

【原文】

『如意方』。治下赤利術。金色黄連一升・黄蘗一斤・犀角二両、凡三物。切以水五升煮、取三升。去滓、内白蜜一升。又煎三升。平旦服、至日中令盡。勿間食也。(『醫心方』巻十一・治赤利方第廿二)

【書き下し】

『如意方』。下赤利を治す術。金色黄連〔①〕一升・黄蘗〔②〕一斤・犀角二両、凡そ三物。切りて水五升を以て煮、三升を取る。滓を去り、白蜜一升を内る。又三升に煎ず。平旦〔③〕に服し、日中に至りて尽さしむ。間食するなかれ。

【注】

① オウレンのこと。

② 黄蘗に同じ。キハダのこと。

③ 文意により「旦」を「旦」に改めた。

【現代語訳】

『如意方』。赤痢を治す術。金色のオウレン一升・キハダ一升・犀の角二両の全三種類を準備する。切ったものを五升の水で煮る。三升になるまで煮つめる。滓を取り除いた後、白蜜を一升入れ、煎じて三升にする。夜明けから飲み始め、日中には飲み尽くす。間食してはいけない。

【補】

○ 医学系治療である。

[39]

【原文】

『如意方』。治鬼瘧方。發日早旦、取井花水。丹書額作天獄字、書背作背獄字、書胸作胸獄字、左手作左獄字、右手作右獄字、兩足心各作地獄字。畢、嚮東咒云「日出東方、隱似没。晝罵日、夜罵月。瘧鬼不死當復殺。清冷之鬼飲汝血、北斗七星何不截。急々如律令。」三過咒便癒。(『醫心方』巻十四・治鬼瘧方第十四)

【書き下し】

『如意方』。鬼瘧を治す方。発するの日の早旦、井花水〔①〕を取る。丹もて書して額に天獄の字を作し、書して背に背獄の字を作し、書して胸に胸獄の字を作し、左手に左獄の字を作し、右手に右獄の字を作し、両足の心に各おの地獄の字を作す。畢れば、東に向ひて咒して云ふ「日は東方より出で、隠れて没するに似たり。晝は日を

罵り、夜は月を罵る。瘧鬼死せずんば当に復殺すべし。清冷の鬼は汝の血を飲み、北斗七星は何ぞ截せざらんや。急々如律令〔②〕」と。三過咒せば便ち癒ゆ。

【注】

① 寅卯の間（午前四時から六時）に汲んだ井戸水のこと。

② もとは漢代の公文書用語で、後に呪術用語となる。早く律令の如くせよの意から、速やかに退散せよの意となる。

【現代語訳】

『如意方』。マラリアを治す方法。マラリアが発病する日の早朝、井花水を準備しておく。（井花水で溶いた）丹で額に天獄と書き、背中に背獄と書き、胸に胸獄と書き、左手に左獄と書き、右手に右獄と書き、両足の土踏まずにそれぞれ地獄と書く。書き終わったら東に向かって呪文を唱える。「日は東方から出て、（やがて）隠れて没するようである。昼は日をののしり、夜は月をののしる。虐鬼が死なないのならまた殺す。清冷の鬼は虐鬼の血を飲む。北斗七星がどうして截さないことがあろうか。速やかに退散せよ」と。三回以上呪文を唱えれば治る。

【補】

○ 呪術系医療である。

［40］

【原文】

又方。計發日、令夕可食。鷄鳴起、着衣履屧屐、随意出戸脱之。途出勿顧。入幽閑隠室、堅閉戸。勿令人知脱。人来呼、勿應。過時勿飲食。飢極但臥思之。至夕乃還。必斷也。（『醫心方』巻十四・治鬼瘧方第十四）

【書き下し】

又方。発するの日を計へ、夕には食はしむべし。鶏鳴けば起き、衣を着け屧屐〔①〕を履き、意に随ひて戸より出でて之を脱ぐ。途に出づれば顧みるなかれ。幽閑の隠室に入り、堅く戸を閉す。人をして脱ぎたるを知らしむることなかれ。人の来り呼ぶも、応ずることなかれ。時を過すも飲食することなかれ。飢極まるも但だ臥して之を思へ。夕に至れば乃ち還る。必ず断ずるなり。

【注】

① はきもののこと。

【現代語訳】

又方。発病する日を計算して、（前日の）夜は食事を取らせる。（朝）鶏が鳴いたら起き、服を着て靴を履き、適当な時に外に出て服と靴を脱ぐ。外に出たらふり返ってはいけない。（その後）誰もいない隠室に入って、戸をかたく閉ざす。（衣と履を）脱いだことを人に知られてはいけない。誰か来て声をかけても返事をしてはいけない。時間が経っても飲食してはいけない。とても腹がすいても、伏してがまんせよ。夕方になったら家に帰る。こうすれば病を治せる。

【補】

○ 呪術系医療である。

［41］256

【原文】

『如意方』。治蠷螋瘡術。揉鷄腸草、傅之。（『醫心方』巻十七・治蠷螋瘡方第十五）

【書き下し】

『如意方』。蠷螋〔①〕の瘡を治す術。鷄腸草〔②〕を揉みて、之を傅く。

【注】

① ハサミムシのこと。

② 「腸」は「腸」に同じ。鷄腸草はタビラコのこと。

【現代語訳】

『如意方』。ハサミムシに噛まれた傷を治す術。鷄腸草を揉んでつける。

【補】

○ 医学系治療である。